

1996年6月23日。旭川市内で自然環境が残っているような嵐山自然公園を訪ねてみる。路線バスの車窓越しに歩道沿いの樹木にエゾシロチョウと思われる大型のシロチョウが群れ集っているのが目に入るがバスは容赦なく進んでしまう。札幌につながる広い国道12号を離れて右手の急坂を左奥まで上り切ったところがバスの終点となっていて、新興住宅地の外れで降りて歩く。ところどころにある草地にエゾシロチョウが舞い、住宅庭の低木の間をミヤマカラスアゲハが蝶道を形成して往来している。カラフトヒョウモンらしき小型のオレンジ色が下方向から林の中へと消える。親子連れが吊橋を渡って対岸の自然公園内に駆け上ってゆく。子供は昆虫採集網と虫かごをもっているが公園内にはどんな昆虫がいるのだろうか。しかし、いい年のおじさんが、あのような子供と競って蝶を追いかけるのはまずいような気がして公園内に入るのはあきらめ、バスの中から見えたエゾシロチョウの大群を確認したく、そんなに遠くはないとの推測のもと徒歩でもどる。バスの終点からわずかもどった辺りで新鮮なエゾシロチョウが複数舞っていてつい道草を食う。近くの住宅の庭木にまとわりつくような飛翔である。そのうち1頭が庭先の草花に降りてきたのでネットインして三角紙に納めていると住宅から奥さんが顔をだし「何かいますか」と問いかける。「エゾシロチョウという蝶で、この辺りで発生しているようです」と答えると「そう、この木に蛹がいっぱいついてたけどこの蝶だったのね。もともと道路下の別の木にいたみたいだけど、葉っぱがなくなってきたのでかなりの数がこの木に移ってきたみたい」と説明してくれる。その木はいずれもリンゴやサクラの類ではなく、本種の食性が相当はばひろいことがうかがえる。

急坂を下って国道12号を横切り、例の大群発生場所が近づくともニレの木と思われる街路樹にもまとわりつくエゾシロチョウが目立つようになる。バスから見えた樹木はモモの木でホクレンという会社の敷地内にあり、歩道とはヒノキの垣根で隔てられているだけで正門にも近い。その



モモの木はどの枝もほとんど葉っぱはなく、枝という枝に蛹が螺旋状に隙間なく付着している。羽化したばかりの♀のまわりには数頭の♂がたむろして、いきなり交尾をしている光景があちこちに見られ、これでは大発生するはずだとあきれてしまう。蛹は垣根や歩道側の街路樹の幹にも付着し、閉じられた正門の鉄製格子のあちこちにもついている。その鉄格子上から敷地内の垣根内側をみたとき、予想もしなかった光景が目



込む。羽化したエゾシロチョウの大群が垣根いっぱい、白一色の帯状となって静止しており、かすかな風にその白い列がゆれてまるで花が咲いているかのよう。この珍しい光景をしっかりと Video に納める。いつのまにかスズメがやってきてこのモモの枝を物色しはじめる。このときは目の前で何も起らなかったが、蛹になってからも鳥にやられることがあるのかどうかは分からない。

1997年7月7日。朝早くきたかいあってオンネト一湖面がまるで鏡のように澄みきっており、遠景が湖面に映った様はみごとというほかなし。やがて風がでてくるともうまったく様子が変わって、発生するさざ波のために湖面の透明さが消えうせる。遅く到着した観光客は先ほどまで見られた美しい湖面を知ることなく帰ることとなる。団体客の少ない奥に進むとやや開けた砂利広場があって、林縁に設けられた花壇に咲くルピナス花上にはコヒオドシが、サクラソウ科の濃いピンクの花には複数のエゾシロチョウが、さらにはあちこちに咲く黄色いタンポポの花にはホソバヒョウモンが蜜を求めて群れており Video のいい被写体となる。

